「出雲の鷹」（上）＝鹿と狼＝より

南條　範夫　著

（文春文庫）

（前略）　224頁以下

富田川を挟んで、富田城に対する石原山の附城に、毛利の命を受けて籠っていたのは、石見の益田越中守藤包である。

毎日、警邏の兵を出して、富田川の西岸を巡視させ、武将も時にこれに加わった。

これに対して尼子方でも、武将や巡察の兵が富田川の東岸を巡回した。

（富田川は、現在は月山のすぐ麓を流れているが、これは寛文六年（1666）の洪水で流れが大きく東寄りに変ったからで、それ以前は西の方、現在の広瀬の町の真ん中を縦断して流れていた。川原を含む川幅も、今よりも遥かに広がっていたものと思われる。そして現在、川の流れている辺りこそ、富田の城下町だったのだ。昭和三十五年、富田川の河原から、旧城下町の遺跡が発見され、多くの陶磁器、木製品、金属製品、鍛冶場跡、窯跡などが出土した）

――今日は尼子方の立原らしいのが見えたぞ、

――今日の美々しい甲冑姿は毛利方の益田越中に違いない、

と、噂し合うようになっている。

益田越中の家臣で品川大膳という男、身の丈六尺（一八〇センチ余り）色黒く筋骨たくましく、両の目尻上がって眉逆立ち、総身に熊のように毛が生えている。

――おれは猪の生首をねじ切ったことがある、

と自慢していたが、その広言ぶりを憎む朋輩は、せせら笑って信じない。

――よし、おれの力量をみせてくれよう。尼子方の若い手では山中鹿之助という奴が最も豪勇だと聞いている。そやつをおれの手で討取ってやれば、誰も二度とおれをこけにすまい。

と、己の名を■木（たらのき）狼之助勝盛と改め、必ず山中鹿之助をうちとると宣言した。

【注】■＝木偏に忽

――「そのお名はどういうつもりだ」

と聞かれると、

――「鹿は■（たら）の若芽を喰らって角を落すものだ。狼が鹿を喰い殺すことは知っているだろう。この名はお前が鹿之助にうち勝って、きやつの甲の鹿の角をへし折り、奴をしめ殺してやるという意味だ」

と、傲然とうそぶいた。

連日、鹿之助の姿を求めて富田川の西岸を歩き回る。

そしてついに、見つけた。

三日月形の鹿の角を卓物（たてもの）にした甲を着、逞しい馬に打乗って対岸の堤の上を行く颯爽たる武者ぶりの男を、川堤の上から認めた兵たちが、

――あ、山中鹿之助だ、

と、立ち止って眺め入る。

――狼之助はその声を耳にして、鹿之助の姿をしかと見届けると、大音声で、

――いかに、そこに行かるるは噂に聞く山中鹿之助殿と見るは僻目（ひがみめ）か。これは石州益田越中守が家中■木狼之助勝盛」

と呼ばわった。

鹿之助が馬を止め、にこっと笑って狼之助の方を見ると、こちらは勢込んで、

――かように川を隔てて連日睨合うているのみでは退屈千万。あれなる中洲にてお互いに一騎打を試み、敵味方の眠りを醒させたいと存ずるが、如何に」

と怒鳴る。

――「鹿之助、うなずいて、

――「数ある人数の中から、某（それがし）の名を指してのお望み、一騎打も面白からん。直ぐにもお対手致すぞ」

川の中程にある洲に向って、馬を降りた鹿之助は、川水を踏んでただ一人進んでゆく。
狼之助も大弓に雁俣(かりまた)とりそろえ、川水の中にはいっていったが、両者の間隔が三十間(五十余メートル)ほどになった時、狼之助がいきなり、そのの大弓に矢をつがえようとした。
矢によって傷を与えておいてから戦うつもりらしい。
川岸にあってこれを見ていた尼子方の秋上伊織助が、
「飛道具は卑怯ぞ」
と叫んだが、狼之助は聞えぬふりをしている。たまかねた伊織助、おのれの弓に矢を番えて、ひょうばと、狼之助が持った弓の弦をずんばらりと射切った。
「尼子方の兵たちは手を叩いて、秋上伊織の弓勢は、唐土の養由にも勝るぞ。川柳の葉の柄でも射抜いてくれるわ」
と、悦び叫んだ。
狼之助は無念気に舌打ちして弓を川中に抛り棄て、川中洲に上がってゆく。
ーの両岸では、山中殿が狼之助と名乗る奴と一騎打をするぞ、見ろ、
ー「狼之助、頑張れ。尼子の鹿を喰い殺せ、両軍の兵が駈せ集ってきて、声援をはじめた。
ーゆと、狼之助は三尺二寸の則光の太刀を以てこれを受け、丁っくりと進んだ鹿之助が中洲に片足をふみかけた瞬間、狼之助は四尺の太刀をふるって斬りかかる。
鹿之助は、双方とも歴戦の勇士、受けつ留めつ、切込み切払い、刃と刃を交えた。
掛声鋭く、闘ったが容易に勝敗が決しない。
そのゆく中、狼之助の方が次第に受太刀となって、後退し
ーこれは拙い、打物とってはきやつの方に一日の長がありそうだ。だが力ならば断じて負けはせぬ、よし、
と、思いめぐらせた狼之助は、ぱっと右手に一間ほど飛離れると、
「山中殿、このような太刀討では、いつ果つべしと思われぬ。いざ、得物を棄てて、組討で勝負を決しよう」
と、手にした太刀をからりと投捨てた。鹿之助もこれに応ずるほかはない。
「おう」
と答えて、太刀を捨てる。
狼之助、躍り込んで、鹿之助とがっきり四つに組んだ。
こうなると、大兵強力の狼之助に分がある。力に任せてぐいぐいと鹿之助を押しまくり押し伏せようとする。
鹿之助は必死に抵抗したが、じりじりと後退し、中洲の端まで追いつめられ、右足に力を込めて踏ん張った拍子に、足を水の中にふみ入れて、柔らかい砂に深くめり込ませた。
両の右肩がぐんと下がり、上から抑えつけてくる狼之助の巨きなかからだにねじ伏せられてしまう。
両岸から、悲喜こもごもの喚声が高く上がった。
ーと、鹿之助危し、すべての者が感じたのである。
そのの刹那、鹿之助は腰の小刀をひきぬき、対手の草摺をさぐりてをたくしあげて、太腹を深く刺すと、思わずあげて上体をよじりと突刺すと、狼之助の腹深傷に刺しぐっと、鹿之助は、更に一刺しえぐった。
鹿之助の首にかけていたれたまらず狼之助は、鹿之助は、対手の首をおさえて、首を両手をを離しまとなる。鹿之助の首をおさえて、首を刎ねて横倒しとなる。
ら切っ返して起きあがり、頸元をおさえて、首を掻
上げると、出雲の鹿が、石見の狼を討とったぞ」
中洲の沙上に突立ち上がり、狼之助の首を高々と差
と、大音声に叫んだ。
東岸に集っていた尼子の兵たちは、どっと勝鬨を揚げる。
西岸の益田勢は、狼之助勝利とみていた瞬間、意外な結果となったので、しばらくは声を呑んでいたが、
「山中を討て、鹿之助を殺せ」
と百四、五十名が川波を蹴散らして中洲へ殺到した。
これをみて尼子の兵も、中洲に向って走ろうとしたが、鹿之助は素早く岸の方に戻りながら、手をあげて、
「今日の勝負はあったのだ。もう、無益の闘いはよせ」
と叫び、東岸に上がってしまった。

川中まで進んできた益田勢は、構わずにつきかけてくる気配だ。その先頭の男に向って、鋭い矢が飛び、胸先を貫いた。

矢を発したのは秋上伊織助である。

秋上に倣って、尼子の兵がつぎつぎに矢を放って、川中の益田勢を斃す。

―不利だ、退け、益田方の誰かがそう叫ぶと、気勢を削がれた兵たちは、罵り合いながら西岸に引揚げていった。結局、益田勢は狼之助以下数名の死者を出したのみで得るところ全くなく、鹿之助の名声を一際高くしただけである。

―いらざる闘いを仕掛けるなと、あれほど固く申しつけおいたではないか。以後、気をつけい。

益田越中守は、部下にきびしく言渡した。（後略）

「武将列伝（三）」

＝山中鹿之助＝ より

海音寺潮五郎 著

（文春文庫）

（前略）218頁以下

鹿之助伝記中の有名な事件、品川大膳と鹿之助との一騎打ちの行なわれたのは、毛利勢の富田城攻囲中のことである。時は永禄八年九月二十日であったという。

品川大膳は毛利方の部将である石見の豪族益田藤包（ふじかね）の郎党でたった。「勇猛世に鳴り、力量人に超え、生ける猪（いのこ）の肩を裂き、乳虎の怒りにもあたる血気の兵（つわもの）なり」と、陰徳太平記にある。

「尼子の家中山中鹿之助を味方の人々は鬼神のように言いなして恐れている。おれは必ず鹿之助と手詰の勝負をして討ってくれよう」

と高言し、名を楡木（たらき）狼之助勝盛と改めた。

春になって鹿の角が落ちるのは楡の新芽を食うためであり、鹿にて勝つものは狼であり、幸盛りに勝つという

ところから勝盛、すべて縁起を担いでの改名であった。

田川の堤を歩いている時、鹿之助が陣所の巡見かなんぞのためにいるのを見つけた狼之助は、川をへだいて呼びかけた。

「山中殿にはこの頃武勇の誉れをとりて、世にかくれなし。かくに申すは益田越中が郎党楡木狼之助でござる。そこをけ給うは山中鹿之助殿ではござらぬか。よう申すそれがしも、身不肖なりといえども、勇を好むの志はおのほとらず、願わくは一騎打の勝負して、たがいの勇力を試みん」

と望むの所なり」

河中の鹿之助は答え、武器は太刀、日時はいつ、場所は洲の日約束を定めた。

助と富田城の若武者ら五、六百人、鹿之助先陣富田川に出た。益田方でも三百人ばかりを先陣に立てて出た。この話を聞き伝えてか、寄手も城方に出て、いずれも目を輝かし、鹿之助を見物に赤糸おどかしの長さ二尺七、八寸ばかりある三尺余の太刀、いつもの兜をかぶり、洲の鎧に、乗馬を乗り入れて洲に向った。狼助はただ一人馬を乗り入れて洲に向ったが、鹿之助に先立つ

「上伊織助が大音声に呼びかけて、聞えぬふりをして捨てない。すでにそえ持て洲に向ったので、秋上は怒って射放ち、狼之助の弦をふっつと射むかえて乗りたる方なく、狼之助は弓を捨てる。そこへ矢をつがいて狼之助の弓を持った。望みかけての一騎打の合戦に、約束通り、二尺三寸の太刀を抜いて切った。膳病に見え候ぞ。弓を捨てて鹿之助が乗りつけて来たので、鹿之助も剛刀をぬいてわたり合った。斬りかかる。

ここの勝負の結果は、陰徳太平記と雲陽軍実記とでは大分違う。

陰徳太平記では、鹿之助が狼之助に斬り立てられて水際まで退ってすでに危く見えたところを、鹿之助に続いて川中島に渡ってきた秋上伊織助がうしろから狼之助を袈裟がけに斬った。狼之助はたまらず前に倒れたが、倒れながらに踏込みざまに払った太刀に鹿之助の膝口をしたたか斬った。鹿之助は首を上げはしたが、歩行かなわず、郎党の肩にかかって引揚げた、と全然よいところがない。

雲陽軍実記では、狼之助が鹿之助に斬り立てられ、すでに危くなったが、「打物わざではかなわぬ。力なら、おれがまさっているはず」と思案して、「やあ、鹿殿、組み申さん。精気を凝らし、もはや一時あまり戦こうても、たがいに薄手も負わず。組みて勝負を決せん」と言い、組み打となった。鹿之助は狼之助に組み伏せられ、すでに刺されようとした時、すばやく鎧通しを抜いて、下から狼之助の草摺りをたみ上げて、太腹を二刀さし、弱るところをはねかえし、首をかき切って、「石見の国より出たる狼を、出雲の鹿が討ち取ったり」と呼ばわったので、尼子方の者はドット勝鬨をあげたことある。

これは多分雲陽軍実記の方が正しいのであろう。両書の一致しているのは、この後、合戦になったことだ。「朋輩を眼前に討たれて見捨ててはかえれず」と、益田方がドットおし出して来たので、尼子方でも応戦して、相当はげしい戦いの末、撃退している。（後略）

一騎討か助太刀か…諸説紛々の軍記

山中鹿之助と品川大膳亮狼之助勝盛の一騎打は一般には山中鹿之助の恰好佳い勝ち振りの方が有名である。

然るに、古い軍記は他にもあって「甫庵太閤記」（元和二年 1616）は「雲陽軍実記」（天正八年 1580）に近い一騎討説。「吉田物語」（元禄一五年 1702）は「陰徳太平記」（寛文五年 1665）と同じ助太刀説をとっている。年代が新しい程鹿之助に不利な内容になっている。

陰徳太平記と吉田物語は毛利の家臣によって編述されているので、品川大膳に同情して書かれたかも知れない。さりとて雲陽軍実記が正しいとも言切れないのは海音寺潮五郎氏が述べている通りである。

これらの軍記に概ね共通するのは

①品川大膳は弓矢をもって一騎打に　臨んだ
②鹿之助には助太刀が居た
③大膳は討取られた
④鹿之助も可成りの傷を負った

と言うことで、これらは事実であろう。藤岡大拙氏はこれらの理由で鹿之助のカッコいい勝ちっぷりは、どうやらかなり割引きしなければならないと述べている。

「美濃町史」（島根県美濃郡美濃町）が紹介している仙道の品川家系図は興味深い。これによると、あらかじめ一騎打は鹿之助は太刀、狼之助は弓で戦うことになっていた。鹿之助は不利だと思ったので、秋上庵介を伏兵において狼之助の弓弦を射切らせたから、二人は太刀打になった。勝負はなかなかつかなかったので、庵介が後ろにまわって狼之助の腰を切ったが、二人を相手にしたため、遂に鹿之助の膝を切った。狼之助は討たれてしまった。

一騎打の勝負に伏兵をおいた鹿之助の行為は卑怯である、と。

「老翁物語」（寛永元年 1624）には『益田内品川狼介と鹿介河中にて切相ひ候所へ、秋上庵介加勢候て狼介を切殺し、鹿介も大手を負ひ候。名誉の合戦也』と述べている。